

令和 4 年 6 月 3 日現在

機関番号：12604

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2021

課題番号：19K23035

研究課題名(和文) 近世における能書資料及び入木道資料の表記に関する基礎的研究

研究課題名(英文) Basic research on calligraphic materials and notation in the Edo period

研究代表者

宮本 淳子 (MIYAMOTO, JUNKO)

東京学芸大学・教育学部・研究員

研究者番号：10849087

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、近世能書資料を対象に、表記実態及びその変遷を明らかにすること、また、入木道伝書の記述を検討し、当時の人々が書や文字に対してどのように捉えていたか、書記意識との関係を解明することを目的として研究を進めた。

調査の結果、入木道によって支えられた伝統的の文字体系があること、また、田藩文庫旧蔵持明院流入木道伝書に、文字・表記に関する具体的な指示を含む資料が存することが明らかとなった。例えば、古今和歌集を写す際に紙面をどのように構成し、漢字や仮名をどの程度交えるかといった内容である。さらに、書記実態との照合から、伝書内容が持明院流の能書家によって忠実に実践されていたことも判明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来、物語中の書や文字に関わる語を解釈する際、書論等が二次的に利用されることはあったが、入木道伝書の内容を検証し、表記現象との関係を位置づけた研究は少なく、本研究は日本語学と書学書道史の研究成果とを有機的に関連づけていく点に特色がある。

特に、古今和歌集など、和歌を用いた従来の表記研究では、説明することが難しかった、表記実態、漢字や仮名表記の分析方法を見直し、書記意識についても考察した点に本研究の意義が存する。

研究成果の概要(英文)： This study aims to demonstrate the actual usage and transition of hiragana and kanji in the expert calligrapher's handwritten materials of early modern Japan.

As a result of a comprehensive survey, we've identified that there were some traditional writing systems supported by calligraphy. We've revealed that there were some books with very specific instructions about knowledge of calligraphy in Tayasu-Tokugawa collection. For example, in those books, we found that the documents contain very specific instructions on how to write the poems and how much kanji and kana to use. In addition, a study of the actual situation and the biographies revealed that the biographical descriptions were faithfully practiced by the calligraphers.

研究分野：日本語学・日本語史

キーワード：日本語学 表記史 書記意識 平仮名 書道史 入木道

1. 研究開始当初の背景

(1) 近世の平仮名表記に関する研究は、様々な観点から調査がすすめられ、実態が明らかにされつつある。例えば、浜田(1979)では、板本に見られる平仮名を整理し、時代が下るにつれ、仮名字体の数(異体仮名の種類数)が収斂していく傾向を明らかにしている。また、矢田(2008)ではこれを再検証し、字体数のみならず、整版本の「字型」の変移についてもふれる。すなわち、個性や筆勢等が省かれ、「粒の揃った」、「肥瘦の少ない形」へと変化していったことを指摘する。

つまり、近世は印刷・出版が本格化した時代であり、平仮名も、伴って生じた時代的变化—変体漢文の書記規則の簡素化・形式化や、学習過程面での変化(「御家流という書体と往来物」という「教科書を通じた画一的体系化」)など—の影響を受け、発達したことが述べられている。

しかしながら、先学の研究を俯瞰してみると、消息や覚書などの記録資料、読本類(板本)などの印刷資料等を主たる対象としたものが占め、偏りが看取される。「寛永三筆」をはじめとする能書家の手に成る資料、書芸術に関わる資料については、専ら書道史の研究の対象とされ、字画・字種ともに、多様な異体仮名の様相については、十分顧みられてこなかったのが現状である。外形的特色や線の美しさといった視覚的印象や運筆面を重視する書道史からは捉えきれない面も多く、日本語学からのアプローチによる書記実態の解明がのぞまれている。

(2) 書道伝書(以下、「入木道伝書」と称する)の検討に関しても同様で、従来、日本語学において代表的な入木道伝書(『夜鶴庭訓抄』『麒麟抄』『才葉抄』などの六書)については参照されることはあっても、いずれも簡単な言及に留まっていた。本研究で扱うような六書以外の入木道伝書となると、扱われること自体が極めて少ないのが現状である。

書を記すための技術および理論を著した入木道伝書の検討は、能書家やその門弟達がどのような点を重視していたかを捉えるうえで、日本語学、国語文字史の一分野である書記意識史から検証される必要がある。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的、学術的独自性は、第一に、近世能書資料を対象に、平仮名および漢字の使用実態および変遷を明らかにする点にある。これらの資料研究が「実用的」資料に比し、立ち遅れている点は前述の通りである。「芸術性と実用性」の相違を明らかにすることで「特性と総体がより明確になる」ことは、木村(2008)をはじめ、日本語学の学界展望でもふれられている通りである。近世書記史の一端をなす、書記実態を明らかにすることは、日本語学、書学書道史両分野の研究発展に資すると考えられる。

(2) 第二に、入木道伝書の記述検証に基づく「書記意識史」の解明が挙げられる。前述の通り従来、物語中の書や文字に関わる語を解釈する際、書論書が二次的に利用されることはあったが、入木道伝書の内容を検証し、表記現象との関係を位置づけた研究は極めて少ない。中世から近世にかけての複雑多様な表記実態には、所謂「経済的理由」「実用上の要請」では説明し難い現象が多く、資料調査の蓄積とは別に、書記背景の究明が必要である。

3. 研究の方法

本研究では、平仮名および漢字の使用実態および変遷の解明を図るため、具体的な研究作業として以下の4点を実施した。

(1) 各資料館所蔵の能書資料、入木道伝書諸本の調査・写真撮影、(2) 資料内容の検討・翻刻・電子化(3) 異体仮名、漢字、補助符号の使用分布を計量的に算出、デジタルデータの作成(4) 入木道伝書の記述を手がかりとした「書記意識」の検証の4点を通じ、上記研究目的の達成を目指す。

入木道伝書については、近年、田安徳川家にまとめて伝来していたことが発見され(『田藩文庫目録と研究』2006年)、さらに同資料館の海野圭介氏、金子馨氏による書誌学的調査が行われ、公開されている。研究の基礎が整備されると共に他領域との関連性が明らかにされつつあり、本研究でもこうした異分野の成果を参照し、日本語学の立場から考究する。

4. 研究成果

(概要)

本研究は、(1) 表記実態調査に必要な資料の撮影・基盤データの作成、(2) 資料内容の検討、(3) 入木道伝書の記述を手がかりとした「書記意識」の検討(4) 研究成果の報告の4つ段階を経て、検討を重ねた。

(2019年度の成果)

(1) 初年度は、研究の基盤となる基礎作業として近世を代表する「寛永三筆」(近衛信尹、本阿弥光悦、松花堂昭乗)をはじめ、近世の能書資料の諸写本、法帖及び「入木道伝書」の現地調査

を各所蔵機関にて実施した。東京大学史料編纂所、東京国立博物館、国立国会図書館、五島美術館、法政大学能楽研究所鴻山文庫など都内施設のほか、京都学・歴彩館(京都府京都市)、松花堂庭園・美術館(京都府八幡市)、金沢市立玉川図書館近世史料館藤本文庫(石川県金沢市)での調査を実施した。9月、12月、1月と定期的に調査に赴き、計画をすすめることができた。

特に京都学・歴彩館(京都府京都市)、金沢市立玉川図書館近世史料館藤本文庫(石川県金沢市)では資料の確認(約80点)と、デジタルカメラによる撮影と平仮名資料のデータ収集を実施、金沢市立玉川図書館近世史料館藤本文庫の調査では、同史料館職員の方からご教示賜り、藤本文庫以外の新たな入木道資料を確認、1月に追加調査を実施した。

研究実施計画の2つ目の柱である、「能書資料」の調査に関しては、西尾市岩瀬文庫蔵藤田乗因筆『百人一首』など影印資料を用い、漢字・異体仮名表記の使用実態の調査をすすめた。従来の書道史研究からの指摘を確認、再検証するとともに、書道史研究で重視される視覚的印象や運筆面からは捉えきれない書流の特徴を捉えていくため、異体仮名の計量的調査を試み、分析した。

調査の結果、松花堂昭乗の高弟で、瀧本流の確立に関わった藤田乗因の資料にまで拡張し、瀧本流の特徴そのものをより明瞭に捉えることができた。松花堂昭乗真蹟で確認された特徴のうちの一部が、模倣が重ねられていく過程で、瀧本流の特徴として取り込まれ、形式化され、固定化していったことが明らかとなった。研究成果の一端は、松花堂昭乗研究所(京都府八幡市)の研究報告会(令和2年3月14日)における口頭発表、報告書で報告する予定であったが、コロナウイルス感染拡大に伴い、やむなく延期となった。

(2020年度の成果)

2020年度はコロナ感染症拡大のため、各所蔵先に出向いての資料調査、撮影を実施することは難しく、2019年度までに撮影、収集してきた入木道伝書の資料を翻刻、検討することを中心に据えた。その成果の一部は、「(翻刻)金沢市立玉川図書館近世史料館藤本文庫蔵『外山中納言光実卿御筆御伝書』(『東京学芸大学紀要人文社会科学系I』72号)にまとめ、公開している。

緊急事態宣言解除後、国文学研究資料館にて持明院流入木道傳書の資料の調査・分析を行い、持明院流入木道傳書の記述内容を検討した。類似資料や関連文献の調査も重ね、当時の人々がどのように表記を認識していたのか、当時の表記に関する意識を考察した。

従来の日本語学では扱われてこなかったが、持明院流の入木道傳書に規範意識に関わる複数の記述があることを確認した。書かれた背景、書記実態との関連性についても調査した。

(2021年度の成果)

最終年度は、国文学研究資料館田藩文庫を中心に、資料調査を継続的に実施するとともに、分析を通じ、明らかになった事柄を公開する作業(基盤データの補充調査、調査結果の公開)に焦点をあてた。

調査の結果、田藩文庫の入木道傳書のうち、当時の能書家が書を記す際にどのように文字・表記を捉え、配慮していたか記された資料が幾つか確認された。例えば、国文学研究資料館田藩文庫蔵持明院基定筆『勅撰之法』および、同内容の記述を含む西尾市岩瀬文庫蔵『和歌秘伝書』には、古今和歌集を書写する際、紙面をと如何に構成し、歌や詞書を配すべきか、また、漢字や仮名を何字まで連続してよいかといった事柄が具体的に指示されている。

資料翻刻や日本語学的立場からの伝書内容の検討を重ねると共に、実際に、勅撰集を写す場合に、どの程度、忠実に実践されていたのかについても、同じ持明院基定の『八代集』(古今和歌集)(宮内庁書陵部蔵)を用い、表記実態を照合調査し、確認した。

研究成果の一端は表記研究会(2022年2月)に発表し、現在は、補充調査している。査読論文に順次、補充調査の結果を加えたいうえ、投稿、公開していく予定である。なお、調査対象とした、持明院流入木道傳書の一部については、翻刻と資料解題、日本語学的観点からの説明をまとめ、『日本文学』に報告した(2022年3月)。また、扱う時代・資料はやや異なるが同じ異体仮名の分節標示機能、句読意識に関する発表を第223回青葉ことばの会にて発表する予定である。

(「近世以前の句読法について-中世能楽資料に見る差点実態の分析を通じて-」2022年6月)

以上、学会及び研究会での口頭発表2回、雑誌論文3点の成果を得られた。

<引用文献>

- ① 矢田勉、近世整版印刷書体における平仮名字形の変化、神戸大学文学部紀要、3号、2008、25-49(矢田勉、国語文字・表記史の研究、2012、汲古書院にも所収)
- ② 浜田啓介、板行の仮名字体-その収斂的傾向について、国語学、118号、1979、1-10
- ③ 木村一、研究資料、日本語の研究、14巻3号、2008、9-16
- ④ 内田宗一、馬琴作合巻『金毘羅船利生纜』の仮名字体-筆耕による表記の改変をめぐって-、国語文字史の研究、5号、2000
- ⑤ 人間文化研究機構国文学研究資料館編、田藩文庫目録と研究：田安德川家伝来古典籍、2006、青裳堂書店

- ⑥ 宮本淳子，(翻刻)金沢市立玉川図書館近世史料館藤本文庫蔵『外山中納言光実卿御筆御伝書』，東京学芸大学紀要人文社会科学系 I 72 号，2021，119-129
- ⑦ 宮本淳子，国文学研究資料館田藩文庫蔵『勅撰之法』・西尾市岩瀬文庫蔵『和歌秘伝書』：日本語表記史研究の一素材として，日本文學，東京女子大学，2022，169-182

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 宮本淳子	4. 巻 72
2. 論文標題 翻刻) 金沢市立玉川図書館近世史料館藤本文庫蔵『外山中納言光実卿御筆御伝書』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東京学芸大学紀要. 人文社会科学系. 1	6. 最初と最後の頁 119-129
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 宮本淳子	4. 巻 52
2. 論文標題 古歌・謡の引用部分における仮名表記—金春禅竹能伝書にみられる異体仮名を例に—	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 学芸国語国文学	6. 最初と最後の頁 108-119
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24672/gkokugokokubun.52.0_108	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 宮本淳子	4. 巻 118
2. 論文標題 (翻刻) 国文学研究資料館田藩文庫蔵『勅撰之法』・西尾市岩瀬文庫蔵『和歌秘伝書』: 日本語表記史研究の一素材として	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本文学	6. 最初と最後の頁 169-182
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 宮本淳子
2. 発表標題 持明院流入木道伝書から見た和歌の書記実態 『勅撰之法』を手がかりに
3. 学会等名 表記研究会研究発表会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 宮本淳子
2. 発表標題 近世以前の句読法について - 中世能楽資料に見る差点実態の分析を通じて -
3. 学会等名 青葉ことばの会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関